



贈ってよし、飾ってもよし
オトコの部屋に、“いいタオル”

綿や麻のクオリティにこだわり、毛足の長さをミリ単位でこだわり、産地や織機にこだわったタオルは、問答無用で美しく、心地よい。そんな極上の衛生用品に囲まれた家、包まれた人は、幸せのオーラが違う。

Photos:Yuya Wada[ROOSTER] Stylist:Miwako Tanaka Text:Masayuki Ozawa

（一）の世に存在するタオルの枚数は限りない。生活の必需品であり、それゆえにギフトのスタンダードでもある。家の中を見回すと、キッチンにトイレ、脱衣場にバスルーム。毎日使っていれば基本、毎日洗濯するからペラペラにも。実はタオルを目にしない部屋は、あってもリビングくらいなもの。客人は必ず自分の家のタオルを目にし、肌に触れる。なんでもいいやと手を抜けば、いくら素敵な家具に囲まれていても、センスの評価は下落する。まして水回りは生活感が最も出やすいエリア。そこに陳列された、人が使うタオルが美しく整えられていて、肌ざわりも心地よいものだったら客人はうれしい。自分自身の暮らしの質だって上がる。「これを使ってよ」と自信をもって人に渡せるタオルを知っているかが、オトコの評価に直結する。色も素材も肌ざわりもバラバラの頂き物だけで積み上げた姿より、お気に入りだけで統一した姿のほうが明らかにホテルの部屋みたいでおしゃれだ。つい重ねたくなるふつからタオル、省スペース化になる薄手ですが、乾くタオル。どちらを選ぶかは生活様式によっても異なるもの。つまりタオルはインテリアと同列に考えたほうがよろしい。奥が深いから、選ぶのも楽しい。